

応用問題を解く鍵も漢字力に

石井方式漢字教育を行なっている小学校では、一年生でも算数の文章題(応用問題)が実によくできます。クラスの大半が満点です。文章題をやるのが楽しくて仕方がないのです。

普通の学校で、文章題の成績が悪いのは、問題を解く力がないためではなくて、かなばかりの文章なので、読むのに苦勞して、読んでも意味がよくわからないので、式を立てることができないのです。

それは文章題の点数0の子に、その問題の文章を読んでやってからやらせてみますと、すぐわかります。たいてい、すらすらと式を立てて、正しく計算してちゃんと答を出します。

文章というものは、全体をすらすらと読み通さないと、その意味がわからないものです。ですから、一字一字、かなを拾い読みしていたのでは、何をどうしろと言われているのか、わからないのです。つまり、問題を解く力はあっても、式が立たないのです。

ところが、目で見ただけですぐわかる漢字を多く使った文章だと、すらすらと終わりまで読み通せますから、すべてうまくいきます。漢字教育をとり入れたクラスほとんどの子どもが満点を取れるのはそのためです。

文章題はきらわれがちですが、その文章がすらすらと読めて意味がよくわかれば、単なる計算問題よりずっとおもしろくて好かれるはず

このことは、算数の文章題に限ったことではありません。理科の学習でも、社会科の学習でも、かなばかりで書かれているために読んでも意味がわからないとか、反対に、漢字が多い参考書だと、漢字が読めないでその参考書を十分に活用できないとか、そういうことのためにできない場合が非常に多いのです。

この意味でも、早い時期に漢字力を養っておくと、漢字を多く使った、本格的な書物を早くから読むことができ有利です。幼稚な書き方の本よりも、本格的な書物の方が、読む力さえあるならば、おもしろく読める。おもしろく読めれば、読めない子とのあいだに格段の差が生じ、その差が拡大していくことも当然でしょう。

近く工学修士になるはずのわたしの長男は、石井方式漢字教育の実験第一号で、幼稚園のころ、すでに小学校四年生くらいの本だったら、らくに読めるようになっていました。

そのため、小学校の低学年のうちから、わからないことは、自分で百科事典を引き出して調べるようになり、特に興味を心っていた理科方面の知識は、学校の先生を驚かせていました。

かれは「自分が数学や理科が得意になったのは、父の漢字教育のお蔭だ」と語っています。漢字教育が国語力を育て、その国語力が機械工学の世界のおもしろさをわたしの長男に見せてくれたのです。

先に引用した「科学や技術に限らず、あらゆる学問が進歩する根底には、国語の力があるのだ」という朝日新聞の社説は、単なる理屈ではなくて、事実の裏づけを持った主張なのです。